

航海にご一緒ください



学芸員 ①

東京湾を埋め立ててつくられた夢の島公園の一角に、第五福竜丸の船体は保存されている。全長30メートル、高さ15メートル、幅6メートルの木造マグロ漁船。船体は三角のテントの形をした建物にすっぽりと覆われている。これが都立第五福竜丸展示館。学芸員の市田真理の仕事場だ。

「福竜丸は核のない未来に向かって航海中です。みなさんも航海にご一緒ください」

船の前で、来館者にそう語りかける。「第五福竜丸は航海中」は、市田が執筆に加わった本のタイトルでもある。

来館者の案内がなければ、展示館の西側にある平屋建ての事務所にいる。

中には小さな資料室がある。第五福竜丸が被曝した日にちなむ3月1日の「ピキニデー」が近づくと、新聞、テレビ各社からの問い合わせも増える。速やかに必要な

資料をさがし、電話で、電子メールで、ファクスで伝える。

「資料を集め、研究する。そして、それらをわかりやすく伝えていく」

それが学芸員の本分だと思っている。研究者や市民団体にもわけへだてなく応じている。

資料室には、公文書や書籍、新聞記事のスクラップが、天井まで届く本棚に並ぶ。市田にとってはどれも貴重なものだ。

第五福竜丸の無線長で、被曝から半年後に亡くなった久保山愛吉に寄せられた手紙もある。励ましの手紙、そしてお悔やみの手紙が

約3千通。地元の静岡県からが600通以上だが、高知県からも300通を超える。

報道機関やジャーナリストが寄贈した資料も保管されている。たとえば、共同通信が外務省と厚生労働省に情報公開を請求して得た文書、フォトジャーナリストの豊崎博光が集めた、機密解除された米国の公文書――。

米国が1954年にピキニ環礁で行った水爆実験は長い間、多くの情報が軍事機密とされてきた。そもそも福竜丸の被曝が明らかになったのも、読売新聞が54年3月16日付の朝刊に掲載したスクープ記事がきっかけだった。

米国が見舞金を支払うという日米政府の政治決着を背景に、54年末、マグロ漁船の放射能検査が打ち切られた。続いていた報道も下火になった。

それでも折に触れて、少しずつ明らかになる資料をもとに、「第五福竜丸の被曝から何年」と記事が書かれてきた。そうやって「ピキニ事件」の輪郭は描かれてきた。

68年3月10日付の朝日新聞の朝刊に掲載された投書がある。「東京湾にあるゴミ捨場、人呼んで『夢の島』に、このあかしはあ

る」。第五福竜丸のことだ。「それは白一色に塗りつぶされ、船名も変えられ、廃船としての運命にたえている」

NHKも翌年、ドキュメンタリー番組「廃船」を放送した。「福竜丸を保存しよう」という声に押されるようにして76年、都立第五福竜丸展示館はできた。

年間約400校が訪れ、来館者は10万人に上る。開館以来、530万人を超えた。人々の関心が福竜丸を今に残した。

市田もまた、残そうとしていく。2013年から福竜丸の元乗組員の市田と七ととも、各地の学校で二人三脚の講演を続ける。市田は自らの活動を「語りつぎ部」と呼ぶ。講演や館内の案内で、こう説明する。

「展示館で見たこと、聞いたことを語り継いでください。語る人がいて、受け継ぐ人がいれば、記憶を継承していくことは可能です。忘れることは、事実をなかつたことにしてしまいます」

そして、言い添える。「神奈川の船も、静岡の船も、高知の船もせつかつた魚を捨てています。マーシャル諸島の島民も住まいを追われたり、病気になるたりしています。被害はグローバルです。福竜丸を孤立させないでください」

その言葉を自ら証明するかのよう、市田は昨年、高知を訪れた。 敬称略

(西村奈緒美)

悲しいんですよね、存在が



学芸員 ②

いかに表現されてきたか」にも及ぶ。1954年11月に公開された東宝映画「ゴジラ」も、もちろん見ている。

「ゴジラって悲しいんですよね、存在が」。太平洋の水爆実験で古代の生物が目覚め、東京を破壊する物語。口からは放射能を帯びた白光を吐く。

「自分のエネルギーをもてあましている、なぜ怒っているのか、

なぜ日本に上陸するのか、そもそもなぜ海の彼方からやってくるのか——」

高知県は2015年3月に室戸市で、11月には土佐清水市で、ピキニで被曝した可能性がある船員やその遺族を対象に健康相談会を開いた。

市田は2回とも相談に立ち会った。福竜丸以外の船員から話を聞くのは初めてだった。

「今さら、やって来て」と言われるかもしれない。覚悟はしていた。

だが、ある船員は「本家本元が来てくれた」と喜んだ。

福竜丸はピキニ環礁の東約160^{キロ}の位置で被曝し、23人の乗組員全員が急性放射能症と診断された。海の男たちはその船の名を忘れていなかった。

船乗りたちの話を聞いて、市田は福竜丸との違いに気づいた。高知では「光を見た」「体がだるい」といった証言はあるものの、

福竜丸ほどきちんと被曝が裏付けられない船も多数あった。

それでも、皆それぞれの思いを抱えていた。「自分のことはもういいが、子や孫への影響はないのか、じっと考えてしまおう」と語る船員もいた。

夫を亡くした妻は「夫は体がいうときかなくて、ぶらぶらしていた」と話した。「親戚からうとまれて、私も『ごくどう』なのかな、と。でも今にして思えば気の毒だった」

「ごくどう」は怠け者の意味として土佐で使われている。

東京に戻った。

水爆実験から60年以上経っても、自分の身に、家族の身に何が起きたのかはつきりさせることができない。素漠とした気持ちを抱えている高知の人々をあらためて思った。

「幕引きしちやいけない」

市田の仕事場、第五福竜丸展示館のそばには石碑が立っている。「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」

刻まれている言葉は、被曝から半年後に亡くなった無線長の久保山愛吉が残したものだ。敬称略

(西村奈緒美)

連載「南洋の雪」は今回で終わります。ご愛読ありがとうございました。

市田真理が核問題に関心を持ったのは大学院生のころ。市民団体「平和博物館を創る会」のスタッフと出会ったことがきっかけだった。

団体は映画監督の羽仁進が代表理事で、戦争体験を記録し、将来にわたって継承していくことを目的にしていた。記録写真集を作る仕事を手伝った。

被爆者、被曝者の姿をとらえた写真に衝撃を受けた。「何も知らなかった」と思った。手記を読み、証言を聞き、映画やドキュメンタリー映像を見た。

やがて人づてに誘われ、2001年から都立第五福竜丸展示館の仕事を手伝い始めた。2年後に学芸員になった。

関心は「ピキニ事件はこれまで

1976年当時、船を覆うようにつくられていく第五福竜丸展示館＝展示館提供